

授業概要

絵巻『画師草紙』を絵画部分と詞書の部分との対応を考えつつ読んでいく。最初にこちらから、発表の仕方、発表のための準備の方法などを説明し、その後、各自の発表により授業を進めることとする。最終的には、古典の基礎知識や古典文法の習得をも目指すこととしたい。

授業計画

第 1 回	導入	第 16 回	導入
第 2 回	変体仮名について①	第 17 回	調べ方③
第 3 回	変体仮名について②	第 18 回	調べ方④
第 4 回	調べ方①	第 19 回	資料の作り方②
第 5 回	調べ方②	第 20 回	発表⑩
第 6 回	資料の作り方	第 21 回	発表⑪
第 7 回	発表①	第 22 回	発表⑫
第 8 回	発表②	第 23 回	発表⑬
第 9 回	発表③	第 24 回	発表⑭
第 10 回	発表④	第 25 回	発表⑮
第 11 回	発表⑤	第 26 回	卒論への取組について①
第 12 回	発表⑥	第 27 回	卒論への取組について②
第 13 回	発表⑦	第 28 回	発表⑯
第 14 回	発表⑧	第 29 回	発表⑰
第 15 回	発表⑨	第 30 回	発表⑱
		第 31 回	定期試験

到達目標

日本古典文学について、自分で調べて発表資料を作成するという作業を身につけてもらいたいと考えている。最終的には、古典の基礎知識や古典文法の習得を目指す。④年時には、卒業論文中間発表会、卒業論文発表会等で全員発表してもらおう。

履修上の注意

「日本文学入門」、「日本文学史概論（古典）」、「日本文学特論（古典）」等を既に履修しているか、あわせ受講することを推奨する。

予習・復習

発表の担当になった時には約 2 週間前から準備をお願いする。

評価方法

ほぼ、発表内容・定期試験（50%）、授業態度、各行事参加状況（50%）の割合で、総合して判断する。

テキスト

授業中に指定する。

授業概要

今年度のテーマは、18・19世紀の英領西インド諸島のプランテーション奴隷制の歴史ならびに奴隷の人口の問題です。このテーマは、ここ30年来西洋の歴史研究の世界で最も注目されているものの一つです。それは、アフリカ人奴隷制とレイシズム、そしてその根底にある性差別という、欧米では今日非常にデリケートな問題に正面からチャレンジする学際的試みだからです。まず予備知識の拡充に努めてもらい、この分野の古典的文献を輪読し様々議論し合います。そして奴隷の生死に関する史料を吟味し、各自の問題点を掘り下げてゆきます。原史料から歴史を探る楽しみとともに、人類の歩みの厳粛さを感じてもらうことが目標です。

授業計画

第1回	春期概要説明：テキスト講読の目的・狙い	第16回	春期成果の確認 秋期授業概要説明
第2回	準備的考察①：歴史人口学と家族史研究	第17回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱ内容概略紹介
第3回	準備的考察②：「新大陸」とヨーロッパ	第18回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む①
第4回	準備的考察③：大西洋奴隷貿易と西インド	第19回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む②
第5回	準備的考察④：「ウィリアムズ・テーゼ」	第20回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む③
第6回	まとめ：黒人奴隷の人口と家族	第21回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む④
第7回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む①	第22回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑤
第8回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む②	第23回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑥
第9回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む③	第24回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑦
第10回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む④	第25回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑧
第11回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑤	第26回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰ・Ⅱについての総括的討論 各自論点の開示と相互吟味
第12回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑥	第27回	原史料吟味①：ジャマイカ Slave Register の読解と感想
第13回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑦	第28回	原史料吟味②：ジャマイカ Slave Register の読解と感想
第14回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑧	第29回	原史料吟味③：ジャマイカ Slave Register の読解と感想
第15回	春期成果のまとめと秋期準備：各自研究テーマの開示と課題小論文の指定	第30回	今年度演習の総括 研究の成果と課題について 各自テーマの開示

到達目標

- ・ 4年次卒業論文執筆準備として調査、データの作成と整理、文献批判・論文構想・小論文作成のためのスキル養成をします
- ・ 海外の時代も文化的背景も全く異なる人類同胞の経験を読み解き、地球的視野を獲得します
- ・ プレゼンテーション能力を高め、実社会で職業人として活躍できる資質を養います
- ・ 自分と異なる意見を尊重しながら、自分の意見をより良く鍛える力を獲得します

履修上の注意

- ・ 「西洋史入門」や「西洋史概説」、「西洋史資料講読」の受講を推奨します。ただし意欲さえあればこれらを受講していない諸君の参加も歓迎します。その際には、必要知識を個別に指導しますので、遠慮なく申し出てください
- ・ やむを得ない欠席や遅刻、早退は、事前に指導教員だけでなくメンバー皆に通知し、了解を取らなければいけません

予習復習

演習は、全員が力を合わせ、心を一つにして初めて成り立つ授業です。そのためにはプレゼンター（1名指定）だけでなく、司会（1名指定）、コメンテーター（1～2名指定）その他のメンバーも、事前に時間を十分にかけて、入念に準備して臨むことが必要です。春期ではテキストを十分に読み込んで参加してください。秋期には、プレゼンターは報告1週間前までにレジュメ（発表骨子）を作成、指導を受けた上で皆に提示します。司会、コメンテーターその他のメンバーは、プレゼンターのために建設的な批判ができるよう、準備してください。

評価方法

- ・ レジュメ並びに小論文の内容の的確さと発表者の論点の独自性、プレゼンテーションやコメントの姿勢の真摯さ、そして演習という共同作業にどれほど貢献できたかを、各回審査し、総合的に評価します。

テキスト

E.ウィリアムズ著 川北稔訳『コロンブスからカストロまで——カリブ海域史、1492—1969——』Ⅰ・Ⅱ巻（岩波書店）。なおイギリスで収集してきた原史料をはじめ、その他必要な文献資料はそのつど授業内で配布する。

授業概要

英語圏(や日本語圏)の子供がどのようにして母語を習得するのかという問題を扱う。はじめは 1 語と意味を結びつけて意思を伝えていた幼児が、生後 18 か月頃から 2 語以上からなる発話を産出できるようになる。2 語発話と意味が結びつく場合、特定の結び付け方にしかならならず、しかもそれは教わらなくとも出て来る。Mommy(ママ)と sock(靴下)の関係でいえば Mommy's sock か Mommy's putting on sock か Mommy's putting sock on me 以外は殆どない。語用論の力が働くので場面から意味は容易に分る。3 歳を過ぎる頃 What's that?だけでなく What do you think Cookie Monster eat? の様な複雑な疑問文も作れるようになる。どうやって Mommy sock の様な単純な子供の文法から複雑な大人の文法へと移行するのか? Progovac (2015)は cry-baby の様な複合語に幼児の 2 語期の「化石」が残存し、統語論がどう「進化」したかの手がかりがあると論じている(Kajita (2004)の「残存構造」も参照)。

授業計画

第 1 回	Introduction	第 16 回	Evolutionary Syntax (5)
第 2 回	The Syntax of Nonsententials (1)	第 17 回	Why Only Us? (1)
第 3 回	The Syntax of Nonsententials (2)	第 18 回	Why Only Us? (2)
第 4 回	The Syntax of Nonsententials (3)	第 19 回	Why Only Us? (3)
第 5 回	The Syntax of Nonsententials (4)	第 20 回	Constructing a Language (1)
第 6 回	The Syntax of Nonsententials (5)	第 21 回	Constructing a Language (2)
第 7 回	Words and Thoughts (1)	第 22 回	Constructing a Language (3)
第 8 回	Words and Thoughts (2)	第 23 回	Constructing a Language (4)
第 9 回	Words and Thoughts (3)	第 24 回	Constructing a Language (5)
第 10 回	Words and Thoughts (4)	第 25 回	Linguistic Typology of Templates(1)
第 11 回	Words and Thoughts (5)	第 26 回	Linguistic Typology of Templates(2)
第 12 回	Evolutionary Syntax (1)	第 27 回	Contiguity Theory (1)
第 13 回	Evolutionary Syntax (2)	第 28 回	Contiguity Theory (2)
第 14 回	Evolutionary Syntax (3)	第 29 回	Contiguity Theory (3)
第 15 回	Evolutionary Syntax (4)	第 30 回	Contiguity Theory (4)

到達目標

論文や文献を読み、概要を作り、そこで取り上げられている問題について議論する。他の論文で同じ問題を取り上げながら、異なる答を主張しているものはないかにも注意する。疑問点を出発点として、同じ現象を取り上げて、再分析を行い、新たな答を見つける。

履修上の注意

積み重ねが大事ですから、休まないようにしてください。またノートを毎回きちんとってください。わからないことがあったら、どんどん質問して疑問を解消してください。

予習・復習

できれば分担表を作って、一緒に論文を読んでゆきたいと思います。背景知識となることを辞典、事典などであらかじめ調査してもらったり、現象について内省、コーパス調査、(思考)実験などをする事になります。毎回、配布された資料や、自分でとったノートを見て復習をし、知識の整理をしておいてください。

評価方法

出席点、ゼミへの参加度、提出物、筆記試験などを総合的にみて評価する。

テキスト

印刷教材を配布します。参考文献は適宜紹介します。とりあえず、次の文献を挙げておきます。
Richards (2016) Contiguity Theory, The MIT Press. Heim and Kratzer (1998) Semantics in Generative Grammar, Blackwell.

授業概要

カルチュラル・スタディーズ 映像社会と現代文化の解読

映像イメージを読み解き、文化現象の意味を考察してゆく。映画、ドキュメンタリー、小説、あるいは漫画や雑誌などに描かれる現在の諸問題を考察することで、現代文化の理解を目標とする。カウンセリングブーム、うつ病の流行、携帯電話、携帯小説、性同一性障害、児童虐待、モンスター、怪獣、ホラー映画、少年犯罪、多重人格、身体障害、テロリズム、ファッション、ディズニーランド、アニメーション、オタクなど、現代社会を表象するテーマを、映画等の映像テキストを分析することで、議論してゆきたい。

授業計画

第 1 回	自己紹介 ゼミの方針	第 16 回	ジブリ映画論 (1)
第 2 回	カルチュラル・スタディーズとは	第 17 回	ジブリ映画論 (2)
第 3 回	更新される映画 アダプテーション論	第 18 回	『エヴァンゲリオン』と苦悩の若者たち
第 4 回	ディズニーランドの文化史	第 19 回	新海誠論—アニメ文化のゆくえ
第 5 回	クトゥルフ神話の文化史	第 20 回	日本の古典的怪談文化
第 6 回	H・P・ラヴクラフト論	第 21 回	『リング』とJホラーの文化論
第 7 回	文学・映画における恐竜	第 22 回	日本における古典的妖怪文化
第 8 回	キングコングと猿の文化史	第 23 回	『妖怪ウォッチ』と現代日本
第 9 回	映画における原子力発電所	第 24 回	同性愛映画の文化論
第 10 回	原爆映画史—放射能の怪物たち	第 25 回	BL小説の文化論
第 11 回	レポート発表会	第 26 回	ライトノベル文化論(1)
第 12 回	ゴジラシリーズと昭和/平成の時代文化	第 27 回	ライトノベル文化論(2)
第 13 回	『シン・ゴジラ』とゴジラの変貌	第 28 回	同時多発テロの映画的側面
第 14 回	怪獣文化のゆくえ—『ポケモン』文化論	第 29 回	テロリズム時代の恐怖文化
第 15 回	日本アニメの歴史	第 30 回	スティーヴン・キング『IT』論
		第 31 回	まとめ ディベート

到達目標

映像イメージを読み解き、文化現象の意味を考察してゆく。現代思想を把握することで、映画、ドキュメンタリー、小説、あるいは漫画や雑誌などに描かれる諸問題を考察し、現代文化の理解を目標とする。

履修上の注意

マナーを尊重して楽しい授業にするために、積極的な参加を望みたい。映画の好きな学生は特に歓迎したい。時にセンセーショナルな映像を見ることがあるので、苦手な学生は注意してほしい。大量の資料を配布するのでファイルを持参。

予習・復習

配布した資料は事前に予習として必ず読み、授業後に再び読み直してほしい。

評価方法

学期末レポート (60%)、提出物およびコメントペーパー (40%) などの総合評価。

テキスト

プリントなどの配布資料 また参考文献については適宜指定する。

授業概要

本演習は、主として日本の近現代史（幕末・明治維新时期～現代）の分野から卒業論文のテーマを設定しようとしている学生を対象とする。夏休みに入るまでに、おおよその卒論テーマを決めてもらうことになる。

春期の授業では、論文の書き方や文献・史料の集め方などの説明を行うとともに、指定したテキストを使って発表と質疑応答を行いながら内容を検討していく。

秋期の授業では、テキストの講読と併行して、各人が設定したテーマについての研究報告（先行研究や文献・史料の紹介、問題の設定など）を行う。受講生全員とのディスカッションを通じて、論文の中身を練ることに努める。

4 年次における卒論作成に向けて、日本近現代史の知識を養いつつ、論文作成法を身につけられるようキメ細かく指導する。

授業計画

第 1 回	春期の進め方の説明	第 16 回	秋期の進め方の説明
第 2 回	論文の準備・作成方法について	第 17 回	卒論構想についての 1 回目研究報告①
第 3 回	文献・史料の収集について	第 18 回	卒論構想についての 1 回目研究報告②
第 4 回	テキストの講読①	第 19 回	卒論構想についての 1 回目研究報告③
第 5 回	テキストの講読②	第 20 回	卒論構想についての 1 回目研究報告④
第 6 回	テキストの講読③	第 21 回	卒論構想についての 1 回目研究報告⑤
第 7 回	テキストの講読④	第 22 回	テキストの講読⑪
第 8 回	テキストの講読⑤	第 23 回	テキストの講読⑫
第 9 回	テキストの講読⑥	第 24 回	テキストの講読⑬
第 10 回	テキストの講読⑦	第 25 回	卒論構想についての 2 回目研究報告①
第 11 回	テキストの講読⑧	第 26 回	卒論構想についての 2 回目研究報告②
第 12 回	テキストの講読⑨	第 27 回	卒論構想についての 2 回目研究報告③
第 13 回	テキストの講読⑩	第 28 回	卒論構想についての 2 回目研究報告④
第 14 回	各自の設定テーマの報告	第 29 回	卒論構想についての 2 回目研究報告⑤
第 15 回	春期の総括	第 30 回	秋期の総括

到達目標

- ① できるだけ早めに卒論で書こうとするテーマをしぼっていく。
- ② テーマに関連する文献や史料を収集できるようにする。
- ③ 文献・史料を読み、内容を理解できるようにする。

履修上の注意

- ① 日本史、特に近現代史に興味を持ち、その分野から卒論のテーマを設定する予定の者が受講することを期待する。
- ② 演習は学生主体で行われるものなので、全出席することが前提である。無断欠席は認めない。

予習・復習

- ① テキストは毎回必ず各自事前に目を通しておく。
- ② 自分の発表に際しては、レジュメを作成する。

評価方法

授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポート 20%

テキスト

『大学の日本史 教養から考える歴史へ ④ 近代』小風秀雅編、山川出版社

授業概要

日本史や日本文化に関連するテーマで卒業論文を書きたいと思っている諸君を対象に、そのための基礎力を身に付けることを目指す。卒業論文を書くには、題材を見つけ、研究の流れを追い、参考文献を読み、史料を調べ、途中経過を報告し、ふさわしい文体・ことばで書くなど、さまざまなテクニックが必要だが、それらについて指導する。

授業計画

第 1 回	ガイダンス（授業の進め方など）	第 16 回	テーマ（題材）を見つける
第 2 回	通時代的な基礎知識	第 17 回	研究史の流れをつかむ
第 3 回	古代史の基礎知識① 6世紀以前	第 18 回	参考文献や先行業績を捜す
第 4 回	古代史の基礎知識② 7・8世紀	第 19 回	参考文献や先行業績を読む
第 5 回	古代史の基礎知識③ 9・10世紀	第 20 回	原典史料を調べる① 史料を捜す
第 6 回	古代史の基礎知識④ 11世紀	第 21 回	原典史料を調べる② 本文を読む
第 7 回	中世史の基礎知識① 12世紀	第 22 回	原典史料を調べる③ 史料批判をする
第 8 回	中世史の基礎知識② 13世紀	第 23 回	文章にまとめる① 構想をたてる
第 9 回	中世史の基礎知識③ 14世紀	第 24 回	文章にまとめる② 下書きをする
第 10 回	中世史の基礎知識④ 15世紀	第 25 回	文章にまとめる③ 推敲して仕上げる
第 11 回	近世史の基礎知識① 15・16世紀	第 26 回	全員が 1 回ずつ口頭発表する①
第 12 回	近世史の基礎知識② 16・17世紀	第 27 回	全員が 1 回ずつ口頭発表する②
第 13 回	近世史の基礎知識③ 17・18世紀	第 28 回	全員が 1 回ずつ口頭発表する③
第 14 回	近世史の基礎知識④ 18・19世紀	第 29 回	全員が 1 回ずつ口頭発表する④
第 15 回	周辺の学問分野や補助学の概要	第 30 回	全員が 1 回ずつ口頭発表する⑤

到達目標

自身の力で吉川弘文館版『国史大辞典』の説明を読めるようになること。これは、日本史や日本文化に関するテーマで論文を書こうとする際の、スタートラインにつくことを意味する。

履修上の注意

- * 高校日本史程度の基礎知識は、各自の努力によって身に付けておいてもらいたい。
- * なるべく幅広い興味をもち、自力で調べようとする態度を求める。辞書や事典類を引くことを面倒がってはならない。また、積極的に発言するように。
- * 遅刻や欠席の扱いについては、下の「評価方法」の欄を見ること。

予習・復習

【予習】 毎回、次の回までの課題を指示するので、教科書（日本史辞典）等を使って調べておく。

【復習】 時間中に獲た知識を整理し、教科書等を使って関連事項を補充・補足するよう努める。

評価方法

期末ごとに筆記試験を行なって評価する。通年科目だけれども、春期末にも試験を実施することに注意。また演習科目であるから、受講態度を重視する。

配点比率：春期末試験得点 40%、秋期末試験 40%、受講態度 20%

テキスト

* 教科書：『角川新版日本史辞典』 朝尾直弘ほか編（最新版，角川学芸出版，2007年）

（注意）毎回持参すること。

* 必要に応じてプリントを配付する。

授業概要

明治から現代まで日本語で書かれた言語による表現を対象に卒業論文を書きたい人のための演習です。基本的には日本の近代小説を扱います。

さまざまな文章を大量に読み、調べ、考え、それによって、「感想」ではない「論」を作り上げることができるようになります。また発表者としては、自らの考えを分かりやすく人に伝えることができるように努め、聞き手としては人の発表をどのように聞き、どのような意見や質問を出せば良いかを考えます。互いに主体的に参加し、生産的な意見交換が出来るよう指導します。

またグループワークを行い、調査の方法や、資料の使い方なども学び、卒業論文に備えます。

授業計画

学外での実習を行う可能性がある。

第 1 回	ガイダンス・授業内容確認	第 16 回	前期レポートの講評
第 2 回	資料調査の方法について	第 17 回	前期レポートの相互批評①
第 3 回	発表の方法について	第 18 回	前期レポートの相互批評②
第 4 回	受講者による発表①	第 19 回	受講者による発表①
第 5 回	受講者による発表②	第 20 回	受講者による発表②
第 6 回	受講者による発表③	第 21 回	受講者による発表③
第 7 回	発表についての補足①	第 22 回	発表についての補足①
第 8 回	発表についての補足②	第 23 回	発表についての補足②
第 9 回	受講者による発表④	第 24 回	受講者による発表④
第 10 回	受講者による発表⑤	第 25 回	受講者による発表⑤
第 11 回	受講者による発表⑥	第 26 回	受講者による発表⑥
第 12 回	発表についての補足③	第 27 回	発表についての補足③
第 13 回	発表についての補足④	第 28 回	発表についての補足④
第 14 回	前期の振り返り	第 29 回	後期の振り返り
第 15 回	レポート作成について	第 30 回	レポート作成について
		第 31 回	卒論発表会への参加

到達目標

- ①日本の言語表現について自分なりの視点を持ち、それを言語化して考察することができるようになる。
- ②他者との討議によって、互いの立場を理解しながらお互いの考察を深め合うことができるようになる。
- ③大学において日本近代文学を専攻したと、自信をもって言えるようになる。

履修上の注意

遅刻欠席をしないこと。

作品を読んでくることは当然として、主体的、積極的な態度で臨むこと。

発言を求められたら、必ず発言すること。

学外での授業を行う可能性がある。

その他のルールは授業内で示す。

予習復習

【予習】決められた作品を読み、意見を考えておくこと。

【復習】授業を踏まえ、作品を読み直すこと。

評価方法

発表・レポート・授業への参加態度をあわせて総合的に評価する。

テキスト

1 回目の授業で話し合っ決めて。

授業概要

今や英語は国際語として確立しているが、その言語の歴史は波乱万丈ともいってもよいだろう。そもそも英語はイギリス人の祖先である北ドイツの小部族、アングロ・サクソン人の言語だった。英語は 5 世紀に彼らがブリテン島に侵出して生を受けて以来、フランスの一地方の領主が 1066 年イギリスを武力制圧した大事件など数々の外圧の影響を受けて、徐々に現在の形に変化していった。その歴史的過程を考察すると、英語の現在の姿が見えてくる。

英語を学んでいると、様々な疑問が浮かぶことがある。英単語の綴り字はなぜ発音通り書かれず不規則なのだろうか。複数形は単数形に s をつける（例えば books）はずなのに、なぜ child の複数形は children なのだろうか。このような疑問は英語を歴史的に考察すれば自ずと解けていく。この演習では、英語を過去から歴史的に分析し、現在の英語をさらに深く理解するとともに、英語学のものの見方を身につけていく。

授業計画

第 1 回	イントロダクション	第 16 回	ノルマン・コンクエスト
第 2 回	古英語から近代英語まで(1) 概観	第 17 回	中英語の主な特徴(1) 一般的特徴
第 3 回	古英語から近代英語まで(2) 練習問題	第 18 回	中英語の主な特徴(2) 仏語の借用語
第 4 回	イギリスの 4 つの地域	第 19 回	中英語の主な特徴(3) 借用語の年代と量
第 5 回	ケルト人、ローマ人の英国侵略	第 20 回	近代英語期：標準語の成立
第 6 回	ケルト語、ラテン語の影響	第 21 回	近代英語期：大母音推移
第 7 回	アングロ・サクソン人の英国侵略	第 22 回	ルネサンスが与えた英語への影響
第 8 回	アングロ・サクソン人の文明	第 23 回	宗教改革が与えた英語への影響
第 9 回	古英語の主な特徴(1) 名詞を中心に	第 24 回	シェイクスピアの英語の特徴
第 10 回	古英語の主な特徴(2) 動詞を中心に	第 25 回	綴り字問題
第 11 回	古英語の主な特徴(3) 語順と語彙	第 26 回	規範文法の成立
第 12 回	ヴァイキングの英国侵略	第 27 回	アメリカ英語
第 13 回	北欧語の影響(1) 本来語と借用語	第 28 回	英語の辞書
第 14 回	北欧語の影響(2) 北欧語の借用語	第 29 回	語源
第 15 回	春期の総まとめ	第 30 回	秋期の総まとめ

到達目標

古英語、中英語、近代英語それぞれの特徴を把握して英語の歴史全体を理解するとともに、英語学の基礎を学び、卒業論文を書くための土台となる力を身につけることを到達目標とする。

履修上の注意

この演習は英語の「歴史」を扱うため、英語が苦手な方でも、英語の歴史に興味がある方ならば受講を歓迎する。テキスト、プリント等はほとんど日本語で書かれたものを使用する。専門科目の「英語史」の講義を受講する必要はない。

予習・復習

授業の内容の深い理解のために、毎回テキストを読んで授業に望み、その後しっかりと復習することが望ましい。

評価方法

授業内での発表（春期・秋期各一回）、レポート（春期・秋期各一回）を重視し、さらに学習に対する姿勢も考慮に入れて、総合的に評価する。

テキスト

渡部昇一『英語の歴史』大修館書店（スタンダード英語講座 3）。適時、プリントを配布する。

授業概要

人間の日常的な行動やふるまい、態度について「心理学的な観点で」研究してみたいと考える学生を中心に、心理学での研究のあり方やその限界点を理解すること、および実際の論文執筆に必要な心理学の研究方法を理解することを指導する。

春期は教員の専門領域である社会心理学を題材とし、過去の社会心理学の著名な論文を「批判的に読み返す」ことを通して、心理学の研究のあり方や限界点を理解できるように指導する。この理解を通し、4年生での卒業論文執筆に必要な「文献講読力」の修得を目指す。秋期は心理学の研究方法に関する入門書の講読や課題の実行を通し、卒業論文執筆に必要な「情報分析能力」の修得を学生に求め、指導を行う。

授業計画

第 1 回	ガイダンス	第 16 回	ガイダンス（講読書籍の決定）
第 2 回	発表順、発表担当章の決定	第 17 回	指定書籍の講読
第 3 回	発表デモンストレーション(教員による)	第 18 回	<ul style="list-style-type: none"> ・受講学生の人数により、1人当たりの発表回数は変動する。 ・単に発表を求めるだけではなく、発表内容を題材とした討論も行う。また、発表内容に関する教員からの補足説明等も入る。 ・指定書籍の発表だけではなく、学生に課題を出して調べてきた内容の発表を求めることもある。
第 4 回	レジュメの作成方法について	第 19 回	
第 5 回	指定書籍の講読 <ul style="list-style-type: none"> ・受講学生の人数により、1人当たりの発表回数は変動する。 ・単に発表を求めるだけではなく、発表内容を題材とした討論も行う。また、発表内容に関する教員からの補足説明等も入る。 	第 20 回	
第 6 回		第 21 回	
第 7 回		第 22 回	
第 8 回		第 23 回	
第 9 回		第 24 回	
第 10 回	第 25 回		
第 11 回	第 26 回		
第 12 回	第 27 回	卒業論文の準備(1)テーマ発表	
第 13 回	第 28 回	卒業論文の準備(2)先行研究探し	
第 14 回	春期のまとめ(1) 心理学論文の読み方	第 29 回	卒業論文の準備(3)論理的整合性とは
第 15 回	春期のまとめ(2) 問題意識の持ち方	第 30 回	全体のまとめ

到達目標

社会心理学を中心とする心理学の考え方をを用いた「卒業論文」を執筆するために必要な力（文献講読力・情報分析能力）が修得でき、関心のあるテーマについての先行研究を自分で調べられ、内容をまとめられるようになる。

履修上の注意

- ・3回の遅刻を欠席1回分と同等に扱うので注意してほしい。
- ・発表を担当する回での無断欠席は厳禁。必ず発表回は回ってくるので、計画的に準備を行うこと。
- ・秋期に、学外で演習を行う可能性がある（例、先行研究探しの回で国立国会図書館に出向く、等）

予習・復習

春期) 自身の発表回はもちろんのこと、発表回以外であっても、各回で発表される章を事前に通読しておく。
 秋期) 春期と同様の注意事項に加え、課題を不定期に出すことになるので、ゼミ時間外での学習時間が増えることを覚悟してほしい。

評価方法

授業への参加態度、発表時のレジュメ、発表の仕方、討議における発言、年度末に課すレポートの内容などをふまえ、総合的に評価する。

テキスト

- 春期) J.R.スミス・S.A.ハスラム(編)・樋口匡貴・藤島喜嗣(監訳)『社会心理学再入門：ブレークスルーを生んだ12の研究』(2017年, 新曜社, ISBN978-4-7885-1539-0, 2,900円+消費税)
- 秋期) 変更の可能性があるが、次の書籍を予定している。安藤清志・村田光二・沼崎誠(編)『社会心理学研究入門(補訂新版)』(2017年, 東京大学出版会, ISBN978-4-13-012112-5, 2,900円+消費税)

授業概要

教育現象を多面的に考える演習である。

最初の 15 分間は、教員採用試験問題を研究する時間である。採用試験の問題が、何を根拠にして、どう出題されているのかを研究する。

その時間のあとは、教育学及教育社会学から、教育問題を考察する。これまで、学力低下、虐待、いじめ、不登校、親の教育力、校則、部活動、生徒指導、個性化教育、教育費、教員の事件、教員と生徒の恋愛といったトピックスを紹介し、その問題について考察している。

毎回ではないが、学生同士のディベートも取り入れている。

秋期には、春期で蓄積した知識と技能を活用し、各ゼミ生が自分の興味ある事柄や卒業論文に書きたい内容についてレジュメを作成し、それについて発表し議論をする。

授業計画

第 1 回	春期演習の運営上の説明	第 16 回	秋期演習の運営上の説明
第 2 回	歴史から教育問題を考察する方法	第 17 回	新学習指導要領の考察（授業はどうなるのか）
第 3 回	1950 年代の教育問題	第 18 回	新学習指導要領の考察（教員はどうなるのか）
第 4 回	1960 年代の教育問題	第 19 回	新学習指導要領の考察（生徒はどうなるのか）
第 5 回	1970 年代の教育問題	第 20 回	新学習指導要領の考察（学校はどうなるのか）
第 6 回	1980 年代の教育問題	第 21 回	発表レジュメの書き方
第 7 回	1990 年代以降の教育問題	第 22 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 8 回	戦前の教育問題の捉え方	第 23 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 9 回	現代の教育問題を考察する方法	第 24 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 10 回	教師に関する教育問題	第 25 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 11 回	生徒に関する教育問題	第 26 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 12 回	教育改革に関する教育問題	第 27 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 13 回	教員組織に関する教育問題	第 28 回	各ゼミ生の発表の総括
第 14 回	教育問題の語られ方を相対化する	第 29 回	今後の教育に関する議論
第 15 回	前期のまとめ	第 30 回	秋期のまとめ

到達目標

教育は、理想論として語られることが多いのですが、教員になる人には、是非「事実、どうなっているのか？」という視点をもってほしいと思っています。そのような視点を身に付ける為のゼミだと考えてください。先生と生徒、という 2 者関係だけで物事を考えるのではなく、社会制度まで含めた広い視野で物事を考えられることを目指しています。

履修上の注意

教職課程を履修している学生が対象です。

予習・復習

予習：こちらが指示する教育問題について、あらかじめ予備知識を得て置く。

復習：ゼミで扱ったトピックスについて書かれてある文献を自ら探して読む。

評価方法

受講態度 60% 春期と秋期の最後に提出するレポート 40%

テキスト

ゼミの中で指示します。

授業概要

本授業は、平安時代を中心とする日本古典文学を題材とし、卒業論文を執筆する技能を指導する演習科目です。作品を読み解く上での疑問点（論点）を発見し、調査・分析を通して自分なりの結論を導き出す過程を、実践的に学びます。また、各回とも発表後に受講生による質疑応答を行い、さまざまな意見を出し合うことで発表内容に対する考察を深めていきます。

前期は、国宝源氏物語絵巻をテーマとして、受講生の発表によって授業を進めます。

後期は、個々の受講生に、興味のある作品・テーマについて発表していただきます。

この演習を通して、テーマの定め方、文献調査の方法、考えたことを正確に文章化する力を習得しましょう。

授業計画

第 1 回	今後の授業の進め方について	第 16 回	前期レポートの総評
第 2 回	『源氏物語』とその時代について	第 17 回	後期授業の進め方について
第 3 回	『源氏物語』三部構成説について	第 18 回	卒業論文テーマの選び方について
第 4 回	さまざまな源氏絵について	第 19 回	文献の探し方について
第 5 回	国宝源氏物語絵巻について	第 20 回	研究論文の読み方について
第 6 回	発表資料の作り方、発表の仕方について	第 21 回	各受講者の発表テーマの確定
第 7 回	受講生による発表と質疑応答①	第 22 回	受講生による発表と質疑応答①
第 8 回	受講生による発表と質疑応答②	第 23 回	受講生による発表と質疑応答②
第 9 回	受講生による発表と質疑応答③	第 24 回	受講生による発表と質疑応答③
第 10 回	受講生による発表と質疑応答④	第 25 回	受講生による発表と質疑応答④
第 11 回	受講生による発表と質疑応答⑤	第 26 回	受講生による発表と質疑応答⑤
第 12 回	受講生による発表と質疑応答⑥	第 27 回	受講生による発表と質疑応答⑥
第 13 回	受講生による発表と質疑応答⑦	第 28 回	受講生による発表と質疑応答⑦
第 14 回	発表内容をレポートにまとめる	第 29 回	発表内容をレポートにまとめる
第 15 回	レポート内容の発表会	第 30 回	レポート内容の発表会
		第 31 回	レポートの提出

到達目標

- ① 『源氏物語』と、国宝源氏物語絵巻について理解する。
- ② 論文テーマの定め方、調査文献の探し方を習得する。
- ③ 掲げたテーマに対して、調査・分析を通して自分なりの結論を出し、文章化できる。

履修上の注意

日本古典文学（和歌・物語・日記など）や、その周辺文化に興味をもつ方の受講を臨みます。前期の第1回授業以前に、初学者向けハンドブックや高校時代の教科書等で、『源氏物語』の概要や主要登場人物を調べておくこと。また、可能であれば「日本文学講読（古典）Ⅰ」と併せて受講することをお勧めします。

なお、校外学習として、美術館や博物館の展示見学を行う可能性があります。

予習・復習

予習：次回の授業内容（受講生の発表内容）を予告するので、下調べをしておく。次回発表担当者は、配布資料を作成し、発表練習をする。

復習：授業のプリントやノートをまとめ直す。発表担当者は、質疑応答を踏まえて補充調査を行う。

評価方法

授業への参加態度（質疑応答での発言を含む）30%、発表の内容 40%、期末レポート 30%を目安として、総合的に評価します。

テキスト

テキスト：プリントを配布します。

参考文献：清水婦久子著『国宝「源氏物語絵巻」を読む』（和泉書院、2011年）の他、授業時に適宜紹介します。